

---

---

## ホットニュース(平成13年度／第46号)

---

---

### ●今月の業界ホットニュース／人ありき

いささか旧聞に属するが、昨年11月に開催された都市計画学会創立50周年記念行事での、経済の宇沢弘文氏の講演が面白かった。

氏は日本の経済高度成長時代に、米国で研究者生活を過ごしておられ、経済指標にみる日本の発展を誇らしく思っていたという。ところが帰国してみると、経済指標にみるような生活の豊かさやゆとりは実感できず、経済学者が指標化する経済成長に疑問を持ち、もっと人の幸せや豊かさに立脚できる経済に取り組む必要性を感じ始めたそうだ。

その時期に、気鋭の経済学者として文化功労賞を受賞され、表彰式で当時の昭和天皇から各受賞者に一寸した質問とやりとりがあったそうだ。先ず霞ヶ関ビル設計者の武藤氏に、天皇「でも地震の時、中にいる人は大変だそうだね」とお尋ねになり、武藤「建物は大丈夫です」と、このやりとりが3回続けられたそうだ。人からの視点と技術・学問からの視点のずれに、この場ではややユーモラスに感じながらも、自らの新たな取り組みに意を強くしたと述懐されていた。

都市計画も同じである。都市計画法第1条の(目的)には、「国土の均衡ある発展と公共の福祉の増進に寄与する」と定義されている。ここでいう福祉は狭義の福祉ではなく、多くの人々の幸福といった意である。公共の福祉に寄与することを肝に銘じながら、業務に取り組んでいかねばならない。

(代表取締役 堀田 紘之)

---

---

### ●TMO組織化の動向について

---

---

中心市街地活性化基本計画とTMO構想の提出状況については中心市街地活性化推進室のホームページで把握されている方も多いと思うが、現在、中心市街地活性化基本計画は455市区町村が策定しており、TMO構想の提出状況はそのうちの約4割の186団体となっている。特にTMOについては全体のうちの約7割(127団体)が商工会議所または商工会がTMOを担う、いわゆる商工会議所型TMOが大多数を占めている。

弊社も数都市の中心市街地活性化基本計画の策定に携わってきたが、その後のTMOの組織化については様々なケースを経験しており、商工会議所が積極的にTMO組織化に関心を持って推進する場合もあれば、行政の思いが商工会議所に伝わらずにTMO組織化が迷走したり、地元商店街など民間が積極的に特定会社の設立に前向きな場合もある。

いずれにしてもTMO組織化に商工会議所が大きな鍵を握っていることは確かであるが、商工会議所型TMOの組織化は商工会議所本来の活動と兼務となり、組織的かつマンパワー的に荷が重くなる危惧から決断に踏み切れないという状況を目にする。これはTMOの活動に対する具体的イメージが無い(出来ない)場合に多く、TMOと言えども肝心なのは地元商店街や民間組織などの実働部隊であり、こうした実働部隊が無い場合や実働部隊となる地元の気概が見えないことに起因する。従って、TMOの組織化を大きな目標としつつも、まずは実働部隊となるべき地元組織を具体化することが肝心だと考える。そういった意味では、弊社が基本計画策定後にTMO組織構築のための勉強会を地元の人々と重ねている活動はTMO組織化への一つの近道的アプローチであると自負している。

最後は自社の宣伝のようになってしまったが、いずれにしても活性化基本計画を策定した市区町村のうちTMOを組織化できた都市が全体の4割程度しかないという実態が中心市街地を活性化する地元の人材不足を物語っているように感じてならない。

(第三計画室 海口 晴彦)

---

---

### ●神奈川県大和市にオークシティオープン

---

---

2年ほど前から大和市の市役所横に計画されていた、「大和オークシティ」が昨年11月末にオープンしました。敷地は2ブロックに分かれ、1カ所はイトーヨーカ堂、もう一方がジャスコをテナントとするイオンモールと、ライバル会社が初めて計画段階から共同で出店する計画でした。延

床面積も約17万㎡、駐車場約3,500台と既成市街地での立地としては非常に大規模であり、当然交通の処理が大きな課題となっていました。交通処理計画として周辺道路の拡幅整備、信号新設によるアクセス性の改善と安全確保等可能な限りの改良を行い、また、2店舗間をつなぐ道路上空車路の設置により主要動線を左折IN・OUTとするなど、施設側で対応できる可能な限りの処理計画としています。それでもオープンから年末にかけては道路混雑が発生していました。しかし、街としてのイメージは塀で囲まれた大規模な工場から人の集まる空間と変わり、生き生きしたものとなっています。大規模商業の立地は、商店街の問題や交通の問題等様々な問題も抱えていますが、人の集まる空間としてのポテンシャルは非常に大きなものがあり、街としての魅力の一つにはなるのではないでしょう。是非一度ご見学に。

(交通計画部長 大沼 安秀)

---

●青年海外協力隊レポートvol.7～モロッコ家族

---

2002年の年明け、ついにモロッコで無事迎えることができた。多少雲は多かったものの、初日の出もばっちり見られた。今年は、1年の全部をモロッコで過ごすのだと感慨を新たに、気持ちを引き締めて頑張ろうと誓った。

さて、日本では大晦日、年越し、正月と言えば一大イベントだが、ここモロッコでは生活習慣においてはイスラム暦に従っているため、単なる西暦の区切りでしかない。イスラム教なので当然クリスマスも関係ないが、年末年始も元旦の日が休みになるのみである。なんだか拍子抜けの年越しである。その替わり、ラマダン明けの小ライド、ラマダン明けから2ヵ月後の大ライドは、家族や親戚を尋ね合う日本の正月のようなお祭りとなる。

モロッコでは家族をとっても大切にす。両親の兄弟の一家とも常に行き来をし、親戚づきあいの範囲も頻度も大きい。また、子供の数が多く、まさに大家族である。子供の歳の差も大きく、一番上と下とは15歳～20歳くらい離れている。そのため、末の子が生まれる頃には上の子がその子の面倒をみられるくらいの歳になっている。そして、上の子に子供ができる頃になると、今度は下の子がその子の面倒をみる。これを繰り返していくと、家族の中に常に小さな子というのがいて、家族全員でその子を育てていくという感がある。こういった環境によって、家族愛が育まれ、また自分が親の世代になっても子育てに不安を感じる事がなく、よくできたシステムであると感じた。

家庭の子供の数は、現状で平均して4、5人であるが、親の世代では8人とか10人とかいう大人数であった。しかし、若い世代の夫婦では、2、3人でいいという認識が広がっているようである。女性もおおいに働くモロッコでは、育児にも理解があり、時間の融通も利くとのことであった。ただし、貧しい家庭ではまだまだ子供は働き手であるという現状がある。特に女の子は、家事手伝いとして住み込みで雇われ、その賃金は父親に払われるという話を聞いた。その子は学校にも通えないが、父親は「女の子は金づるになるからもつと欲しい」というのだ。モロッコ政府は今、ポスターを作るなどして、子供を働かせずに学校に行かせるキャンペーンをしているようである。

(第三計画室 酒井 夕子)